

# 報會曲千

社圖法八千曲會

第三十二號

昭和十八年九月二十五日

## 船に就いて

柳澤延房

### 其の二

次に只今盛んに叫ばれてゐる木船に就いて一寸申し上げます。木船の黄金時代といへば前世紀の中頃ですが鋼船の發達と共に木造巨船は姿を消した形でした。所が前大戰に於てコンクリート船と共に再び木船が現れて來ました。やはり前大戰當時も船不足のため北歐、北米等で盛んに建造されましたが、戦後は大部分拂下げられ解體されて仕舞ひました。木船は鋼船と比較すれば澤山の缺點を持つてゐるからです。船體強度の不足、水密工事の完全に出來ぬこと、船體彎曲量が大なるため、クランク等が時に廻らなくなること、機關臺の固着地み振動激しくなり馬力の効率悪し、船體寸法に比し載貨量少し、腐蝕し易く又蟲がつき易いため壽命短し。以上の缺點は鋼船と比較しての事ですが現今の様に極端な船腹不足を告げる際には、之等の缺點を出来る丈少くして多量に建造せねばなりません。標準型を一〇〇、一五〇、二五〇噸としたのは強度等の點から至極妥當のものと思はれます。そこで只今は大資本會社が續々と木船建造會社を設立、大規模な計畫のもとに建造を急ぎつゝあります。木船工場は三井物産を始め、日本郵船、大阪商船、日産汽船、辰馬汽船等々日本の至る所に建造され、又されつゝあります。そこで造船所の數を一寸申し上げますと昭和十四年現在一千噸以上の鋼船建造設備を持つた私設のもの大體〇〇、それに官營のもの〇〇であります。

次に船が出来上る迄の順序を簡単に申し上げます。初め船主の方からの注文がありますが、大體、どんな品物を積む船であるか、又その用途が指定され、速力航路と旅客定員數載荷重量等が定められて注文されます。そこで會社側は設計に取り掛かるのですが、載貨重量から排水噸を定むるので夫々未知數が含まれて居り、それ等の未知數は相關聯し居るから到底數學的一般解法は得られません。そこで實際記録を参照し一方設計者の經驗と判斷から大略の排水量を算定し、之で要求條件を満たせしめ得るや否やを漸次計畫を進めながら檢算をなし幾度も幾度も繰返し最後の決定をなすのである。勿論單に形が出来た、水に浮いたといふ様な簡單なものではありません。船體の強弱、抵抗、馬力、復原性等々が總て理法になつて設計されねばなりません。設計で大事なことは既成船の記録を参考にすること、模範試驗です。之は後に一寸申し上げます。

かくして大體の設計から細部に亘つた設計に移り、何度も検討して之で宜敷いと云ふ事になれば、その細部細部の圖面が各工場に廻送されます。材料の加工即ち曲げる、切る削る、鋳もみ鍛接、鐵金等全部は各工場でなされ、それ等が組立ての場所即ち船臺に運ばれます。船は大變長いものですから物指の少しの狂いや溫度による膨脹係數の相違等から鉋穴が終りの方へ行つて喰ひ違つたりしたら大變です。鉋が打てません。さうした種々の誤差を考へて喰ひ違ひを生ずるのが確率の上から考へて當然なことではあります。それは素人のいふ事で熟練工はその誤差を作りません。加工され整備された材料は手順良く船臺に運ばれ組立てられて行きます。龍骨を据付け、そこへ肋骨が組まれ梁が渡され甲板、甲板、隔壁等が取付けられて行きます。その間鉋打機は船臺の方で大きな音で鉋打ちしてゐます。鉋打ちは兩方から同時に打ち込むのですが、鉋の尻の方から誤つて先に打たうものなら相手の腹でも、何處でも貫通して仕舞ひます。又鉋を打ち込むのに攝氏七三〇度位の時に打ち込めば鉋は丈夫です。之に對し熟練工は恐ろしい感の力で熱せられた鐵の色合ひから七三〇度を見破るのです。船はこの鉋打ちが最も大切なことで、進水した後或は航海中鉋穴から水が漏つたり、波に甲板を叩かれて、弛むやうな事があつてはなりません。そこで熟練工でも不熟練工でも打つて仕舞つた外觀は同じやうでも鉋が鉋穴一杯に充填されて居らねばなりません。他の熟練工が鉋頭を金鎚で非常な速さで一つ一つ打ちながらその響く音で鉋が正しく鉋穴を充填して居るかを聞き分けるのです。此處まで來ると技術も大したものです。種々技術の事を申しましたが、私は以前某新聞報道班員の話を聞いて感心した事があります。南海で我が海軍將兵が毎日毎夜繰り返してゐる艦上砲擊訓練の事であります。目標距離を定めるもの、標尺に合せるもの、彈丸を運ぶもの、彈丸を込めるもの、射つものと言ふ様に各持場持場の猛訓練である。彈丸を込め

るものは、彈丸を持つて砲に込める只それ丈の仕事を開け暮れ返してゐる。少し學問をした高等の學校を出たと自負する人は、何だ之丈の事なら十分か精々一時間の訓練で充分だと言ふかも知れない。所が技術といふものはそんなものではない。我々が鼻の頭が痒ければ、どんな痒い所でも又眼を開けてゐても、一分一厘の誤りなく痒い所に手がすつと行くその訓練を兵士はやつてゐる。それでこそ日本の砲の命中はいゝのだ。夜戦が強いのだ。闇の中で晝間と同じ操作が出来る。馬山沖でバルチック艦隊を待ち受けた間の何ヶ月間の艦上訓練の猛烈さはなかつたといふ。明けても暮れても砲撃練習である。軍艦の動搖する時の發砲が普通だからといふので他の兵士は、それこそ足を棒にして、一隊となつて左舷から右舷に右舷から左舷に移動して砲撃訓練に力を合せたのである。私共はこうした事をよく味はつて見ねばならぬ。失禮な言ひ方ですが皆の實習時間に於ける態度や心の用意をもう一度反省して見る必要はないだらうか。船の外形が出来上つたら壓力試験をするのである。船の部屋々々の戸を閉ざし各部屋毎を密閉して高壓の空氣を入れ、或時間中に壓力の減少なきか、又タンク等では水壓試験を行ふ。水漏、空氣漏のないのを確かめた上進水である。豫め進水壺を造りその上に船を乗せるのである。初め方々へ砂囊を積み重ねその上に船を支へ次に砂囊を破つて静に進水壺に船を乗せる。進水壺の設計も仲々容易でない。進水力によつて普通船の方を先にして進水するのであるが一部分船が水に浸つた時などの力の作用を考へて見ると、

さ、浮力、水の摩摺力、進水壺からの反抗力及び摩摺力、空氣抵抗等で之が瞬間毎に變化移動するのである。誤つたら横に倒れたり、眞二つになつたり、船のステムが破損したり、水が上甲板を浸しハッチから水が船中に流れ込むことになる。進水壺の勾配は二十五分の一で進水壺一平方呎に乃至二噸位の重みがかかる程度に設計されてゐる。進水壺はすつと長く海水中に延びてゐる。進水間近になると朝早くから潜水夫が海中で作業して居る。潜水夫の妻が船に据えたポンプで空氣を送つてゐる。朝早く進水壺の所へ行くと方々から小舟が集つて来る。皆夫婦で潛きながらやつて来る。夫が潜水中で妻が空氣を送るのだが以前は男同士で組んで居つたが男といふものは呑氣で時にはポンプの手を弛める事がある。中には忘れて仕舞ふものがある。之では潜水夫が助からぬ。妻にポンプを任せて置けば絶對安全である。船が初めて海に浮ぶといふ船の誕生を祝ひ、將來への幸福を祈りつゝ職員職工が居並んで進水式に参列する。自分達が數年間その持場々々に全責任を持ち精魂を打ち込んだその船が將に海面に浮ばんとするのである。進水壺を船が滑り出るその刹那の感激こそ尊いものだ。眼に涙して滑り行く船を眺めやるのである。全我を捧げて跪き得る感激こそ純なるものである。進水の後、船の艤装、整備をなすのである。機關の据え付けから船室の整備のため職工、大工が入り込むのは海面に浮んだ後のことである。次に正確な試運転がなされる。速度試験、傾斜試験、動搖試験等がなされる。(續)

## 山村の初秋

どくだみ

連日増盛々々で有機的に廻轉する山村も初秋となるとよつと一息つく事が出来る。そうすると今迄の忙しかつた間にゆつくり笑ふ時さへもなかつた事が思ひ出され、いや、あの時はなどい、よく色々な事にひき出されて聲を合せて笑ふ事もあつたので面白。かうして今度は本格的な秋となれば、もう雪までは、いや雪となつても農村と違つて山村は忙しいのだが、それまでは飯を食ふ暇も惜しい位になるのである。

防空演習があつた、田舎のことゝて爆弾や、焼夷弾の代りに手近な薬に火をつけ放り出すと、それ！と、そこでこの組は何分間に消した、と言ふ講評になるわけである。

そこで村の中央からはなれた、ある隣組長が考へた、なんとかして村一番にやらんものと、まづそれには、何れその火つけ係が来るに相違ない、そいつを早く見つければよい、と思案して、道が合さる適當の草置小屋の上に朝から飯を持ち込んで向ふ鉢巻で番をすることにした。

案の上、宵闇がとつぷりとあたりを包んだ頃二人で火つけ係がやつて来た。わが事成れり、と見へがくれに後をつけて途中で間道から先になり、部落へ入るや今に來るぞ、皆な出ろと萬端整つた處へ何も知らん火つけ係が、こゝらの邊と、火をつけるや否や、屋根の上から、木の枝から、石垣の上から、八方から水があたかも瀧の如くおち撒かれて、火諸共、火つけ係がビシヨ濡れになつた。

細工は粒々、と此の隣組長、ニヤリと會心の笑をもらした、そうな。

これが附近へ擴がつて藥の爆弾は、さきまはりなされて、もう駄目だ、さてうまい方法がないかと警防團が頭を捻つたと言ふ、これがその一つの笑ひばなし。

材木商賣の大將がある、酒が好きなので胃の調子がいづもよくない。今日もどうもいかんと云ふので仕事の戻りの暮れ方知人の宅へ、胃散はないか、と立寄ると、そりやちようどよい、昨日福島から買つて來たばかりの天下一品と云ふやつがある。それぢや頼むと云ふわけで澤山のんで、誠にすまん、と歸つて行つた。

その夜半、どうも腹具合がよくない、あの胃散をと思つて出して見たところ、先刻やつたはずの藥が減つてゐない、さて變だ、狸もあまいが、さてな、と色々考へた。や！しまつた、とんでもないことをしてしまつた、今頃腹がやけて死んだかも知れん。カンテラにともした後のカーバイトの粉を、なにかの役に立つだらうとしまつて置いた、そいつをのませました、大變だ、大變だ。と女房がなぐやら飯鬼がわめくやら、すつぱだかて宙をとんでかけつけて見たら御當人は悠々とねて御座つた。まづ一安心、實は、これくしかの次第と辯明に及ぶとそうか、どうも腹が痛い、痛い、だんだん痛くなる。これや死ぬかも知れん。醫者だ、醫者だ。結局醫者に來てもらつて胃洗滌をやつたが、あれはきたない、はなが出るやらよだれが出るやら涙が出るやら。笑ひばなしで終つたと言ふ。これがその二つ。

どこの村にも奇人がゐる。あはて、物

をよく忘れる人で、右は當三郎。

山仕事の行きがてらに、どうだ當三、今日も何か忘れつら、いんや今日は大丈夫だ、人を馬鹿にしやがつて、と自信満々である。一吹ひして、さてかゝるかと言つたトタン、しまつた、鉈を忘れた。腰にあるぢやないか。中味を忘れてしまつた。連中晒然たり。その歸り道、何か忘れたか、ウンそう云へばどうも變だ、馬鹿に涼しいと思つたら、あゝ、汗が汗で巻きついてかなはんで取つて敷へ乾かし置いて、そいつを忘れてしまつた。フー。

よく申味を忘れたんだな！は後ではなし。

これが鋸にかけては名工である。切れ味は定評。合槌を頼んでトントン、カンと次第に調子が合つてくると、槌の長さが一尺もあり、細いので素人にはうまく打つところへ當らない、さあ當人は夢中で、なんだ飯を食つたか、駄目だ！眞中だ、眞中だ、べら棒奴。

いゝ歳しやがつて、女房に用はあるめえ、腰がふらつく、しつかりしろい。駄目だ、駄目だ、男かそれでも。

槌の音と殆ど同じに悪口が出るからやりきれん。よし、一丁出来た。へへ……御苦勞様。合槌をやつた連中これにはかなはん。と言ふはなし。

山村の盃蘭盆は仕事の都合で八月十五日とは限らない。九月一日、二日、三日がお盆である。

踊りがある。木曾踊の外に盆踊と言つて獨特の踊りがある。これはむづかしい唄がむづかしい上に、踊がなかく手や足を動かすだけでなく、所謂シナがなくはなつてゐない。踊は踊る人だけかと言ふと、いつまでも見てだけゐる人があつた。こう云ふ人達は見えてゐるだけ結構な海酔するらしい、氣持で唄ひ、心で踊る

と云ふのだらう。

夜も次第に更けると木曾踊の若い連中はそれ／＼の目的に従つて行動して誰もゐなくなつてしまふ。變な氣もするが、こんな處では、若い同志が識り合ふ機會はふだんは全くないのだから、祝日にその機會を求めるよりは致し方がない。綿々として一夜を明しても尙盡きぬものがあつたらう。都合の悪い結果になつてもそつぽを向いてしまふ様なことは絶體ない。相互に誠實でさへあればいゝのだから差支へないわけである。

だから踊は單なる踊だけではなく若い魂の働き合ふ年に一二度の無二の機會であり、やがては過去の色々な思出の場面となるのである。これがあれば山村は潤ふのである。これが山村の色々な純風美俗の源泉であり、凡ゆる風物の焦點である。

そんなわけで若い者が去ると踊は、盆踊一點となる。唄詞は

盆が来たぞぞぞお寺の庭のきりこ小燈籠に灯がともる

と云ふ様な詞をゆるく、手ぶり、足ぶりに合せて踊るのである。

年寄と言ふ年寄は大てい出て、踊れるものは踊り、終まで見るものもある。

中には祖父、祖母三代位で踊る人もある。ふだん黙つて働いてばかりゐる中年の女が、きれいな聲で唄ひ出すと形容も出来ぬ位であり、年寄の女が若い時にかくやとばかり、手ぶり足ぶりを振つて品よく踊ればこれが盆の粹である。

一時になり二時になる。

踊る人も踊らぬ人も、あたりの風景も宛然、このわずかの人数へ溶け込んで一切の形がなくなり踊りと云ふ柔い運動性のある物體になつて表現されてゐるかの錯覺を起す。

こうなれば、

四五人に月落かゝる踊かなの句の情景となるのである。

こうして踊り果て、またあしたもな

あ、と言ひながらそれ／＼の家へ歸るとあたりが再び固有の形に戻るのである。

そして既にいくばくもなく黎明である。踊るだけ踊りて戻る月夜哉

(此稿未完)

### 短歌

そここの樹々の一葉に思ひ出のひそめ

るがごとくなつかしき母校

疲れ果てし吾を迎えぬ母校は夢ありし頃

のまゝに優しき

日暮れ来て静しにけり庭木々のしやま

破りて蜩の鳴く

野に立てば稻田を渡る秋風に萌黄なる穂

のゆらゆらと見ゆ

繁樹

九月 詠草

うたのつどひ

朝々を如耕しぬおのづから歟とらぬ日は

淋しかりけり

讀書疲れに我が伏しをれば夜の街に征く

兵送る聲とどろくも

久にして夕立来れば窓に倚り十坪の庭を

あかす眺むる



### 科學點描 (14)

#### 蠶の痛覺

毎年數十萬頭の蠶の生靈を奪つてゐる吾々の仕事を時々振返つて見て、この無限の空間に一時の生命を持つて現れた可憐な蟲を無慘にも切りさいなむ事について慄然とする、どんなにか苦痛であらうと。

處が最近讀んだ本に下の様な事があつた。『節足動物の大部分では痛覺は否定出來そうである、ある時偶然にもイモムシが後半身に傷をおひ血液がそこから流出してゐた、するとこの蟲は自分の口をそこに近づけ體を喰ひはじめその後半身を喰つてしまつたといふ。又ミツバチが蜜を吸つてゐる時非常に靜かに胴體の後部の一部を切り落しても尙そのまゝ蜜を吸ひ續けてゐることがあると。

この事實は痛覺の存在とはどうしても合致し得ない。』アッテンプロック著「感覺の世界」カマキリの雄の運命は有名な話であるがこんな事から類推すると、蠶も恐らく痛覺に關してはこの部類に進入し得るのかも知れない。

何んとかく殺生の罪の一部が輕くなつた様に感じた。(蠶二〇市川信一)

### 母校便り

#### 養蠶實習終る

母校の養蠶實習は五月以來養蠶科二年、三年、製絲科一年の順序で施行されてゐたが、八月三十一日養蠶科一年の秋蠶の收購を最後にこゝに本年度の實習は何れも好成績を收め

て無事終了した。

### 夏期鍛錬週間行事

本年度の後期授業は八月二十四日より開始となつたが、二十五日より三十一日まで鍛錬週間とし毎日午後一時より四時まで各級共に左の行事をなした。

勤勞作業 (防空待避壕掘草)

武道 (剣道、柔道、射撃、銃剣道)

尚最終日の三十一日は全校員出勤の下に決戦下の防空訓練を行ひ幕を閉じた。

### 卒業團員送別式

本年度の卒業式は九月二十三日舉行されるが之に先立ち學校報國團の送別式を九月四日施行した。先づ井上校長の送別の辭、續いて在校生柳田親規君(蠶二)の辭があり之に對し濱佐加三君(蠶三)の答辭を以て終つた。

### 柔道班表彰

母校柔道班は本年六月六日宇都宮高等農林學校に於て開催された關東高農蠶水柔道大會に優勝の榮冠を獲得して、遂に六年連覇の偉業を完遂したことは既報の通りであるが、之に對する表彰式は九月四日講堂に於て行はれた。柔道衣を着した班員が優勝旗を先頭に於て入場すれば全員拍手を以て之を迎へやがて校長先生より榮譽ある表彰狀が授與された。めでたし。

### 夏期遠征勤勞報國隊報告

過般文部省主催の下に開催された勤勞報國隊の母校出場學徒の報告は九月四日十五時から講堂に於て樺大行の紡二年田中宗一君、北海道行の化二年藤野君に依り夫々行はれた。何れも貴重なる體驗を決戦下非常時局の

學徒としての旺盛なる意氣を以て述べ其の極めて有意義なるを昂揚した。

### 三年生の陸海軍合格者

苛烈なる戦局に應へて應募した母校本年度卒業生の陸海軍への合格者は左記の通りである。

海軍航空豫備學生  
養蠶科 淺田 勝夫 上野 正美  
川島 守 小田 等

製絲科 高岸 三善 清水 茂一  
中島 一夫

纖維化學科 天野定夫(化一卒) 塩塚良二  
仁熊 毅

陸軍特別操縦見習士官  
養蠶科 小平 一彦 牧野 嘉雄  
製絲科 高柳 悦夫 布施喜一郎

陸軍技術科(兵技)見習士官  
纖維化學科 柳澤 俊信  
海軍技術部見習士官

纖維化學科 小田 直人 宮下 陸夫  
片山 敏

### 射撃班松高に快勝

九月十二日母校射撃班は松高射撃班十八名を迎へ、上田射撃場に於て井上校長、國防部長林教授臨席の下に對校試合を行つた。其の得點は母校三百十九點、松高三百十點にて接戦の後母校の快勝に歸した。

### 須田教授内地研究の爲

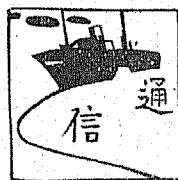
#### 東京都に出張

須田圭二教授は文部省内地研究員として九月一日より向ふ四ヶ月間東京都に出張される事となり既に上京された。先生は主として東京帝國大學農學部農藝化學科春井研究室、農林省蠶絲試驗場、農林省農事試驗場等に於て

研究を進められる豫定である

先生の在京中の住所は左記の通り

東京都本郷區南坂町一六番地 曉雲閣



ビルマ軍政監部

瀧澤 芳樹

### ビルマ通信

其の八

ビルマの雨季は大體六月下旬から始り九月下旬に終ります。最盛期は七、八月です。赤道附近の様に純然たるスコール形でなく内地の梅雨形です。これに猛烈なスコールが混ります。温度は九州の秋口と云ふ所です。動く矢張り熱帯だけあつて相當なものです。先日苦力十人に官舎の庭の除草をさせました。約十日間を要しましたが第一日に除草した部分は十日目には前と同じ状態になつて居ました。雨季の間に樹木はどん／＼育ちます。マンゴーの種は捨てから三日目に根を下し四日目頃には芽を出します。パイアは今二度目の實を育て、居ます。ブロームの東北二五哩の所にバコンと云ふ所があります。養蠶地帯です。多化性の(内藤さんの鑑定です)虫で私が見た所内地のボケ蘭です。その替り一年中幾度も蘭がとれます。併し雨期に養蠶したものが最秀です。開繭して紡績用と云ふ所ですがビルマ人は幼稚なこの法で時に借りはなく許りに曲りなりにも繭にします。繭などは問題にならぬのです。が同功繭は割合少い様です。桑園と稱するものは在りますが考古學的に重要と云ふ程度です。では又

其の九

トンゲーと云ふと皇軍舊戦の地ですがこの直ぐ北にスウと云ふ所があります。此所も養蠶地帯です。日本でも諏訪は養蠶製絲の中心ですがビルマでもスウです。バコンと同じで原始的にやつて居る丈と思ひます(未だ行つて見ません)その附近はスウカの産地で皇軍勇士は助つた相です。トンゲーと言へば群馬社に勤務して居た森さんが居ります。元氣でやつて居りました。ビルマで養蠶地帯はアキヤブ方面、ブローム方面、トンゲー方面、シユエボー方面と大體この四ヶ所です。日本の蠶絲業が餘りに水準が高い爲「あの松島や松島や」と云ふ所です。木曾君がデングをやつたので君でもやるかとひやかしたのはいつ二、三週間ばかり前でした。が小生もブロームから歸ると早速やりました。熱は急に來て四十度が二日三十八、九度が二日、三十七、八度が三日合計七日間で大體終了です。後の養生が大切で十日乃至十五日は自重を要します。胃腸を弱められる爲です。内藤さんはビルマへ出張で留守、北原さんは〇〇に居ます。

山崎君元氣でやつて居る事と思ふ、若い元氣の良い學生を送つてくれないか老人は駄目だよ。精神とか何とか云ふが云ふ所では體力が第一だ從つて老人でも體力がズバ抜けて居れば良い。その點僕なんか未だ不良の部類だ。將來戦争の續く中は化學纖維だね、テマのかゝる事は一切戦地では(國內も戦場である)駄目だ。英語には弱つて居る、敵器を利用すると云ふ事で當分致し方無い。

本會記事

本會日誌

八月五日 本年度會費納入方告知す

八月十一日 松田眞二氏戰病死を遂げらる弔

電を發す

る弔詞を呈す

學子

志弔慰金を呈す

支會長更迭

埼玉千曲會長及事務所左記の通交悉せり

同 退 任 淺 見 好 雄

玉出張所内田口傳輔方

會費領收

九月五日  
現在

入會金納入者  
完納者

河川	秦(蠶三)	横關	源延(蠶三)
青木	靜志(絲四)	小泉	正衛(紡三)

昭和十九年度會費金四圓也

昭和十八年度會費金四圓也  
公司 首也(蠶四) 中島靜太郎(蠶五)

橋本 武光(蠶七)  
齋藤 鳳一(蠶八)

米田	俊雄(蠶二)	佐藤	義助(蠶二)
----	--------	----	--------

大谷内三徳(蠶三)	丸山十吉(蠶三)
山口定次郎(蠶三)	安川寛(蠶三)

山口定次郎(蠶三) 安川 寛(蠶三)

北島	正生(三)	內田	調之苑(三)	原	博(三)	宮城	博(三)	野澤	馬作(三)	氏家	忠次(三)	小口	惠治(三)	山下	忠雄(三)	熊谷	恒次(三)	今井	和人(三)	小林	辰夫(三)	北原	亮喜(三)	森	一平(三)	山本	龍哉(三)	岩下	正信(三)	坂口	市川敏三(三)	市井	武四(三)	松野	外史(三)	宮入	保藏(三)	類富	正廣(三)	石原	滿洲丸(三)	西澤	浪一(三)	芳文(三)	賢造(三)	前島	正直(三)	坂口	育三(三)	小林	敏藏(三)	渡邊	嘉博(三)	山村	泰三(三)	井口	澄男(三)	小野	忠藏(三)	桂	元三(三)	樞內	一郎(三)	玉田	城三郎(三)	松永	義德(三)	松元	次男(三)	長末	方大(三)	鈴木	彦佐(三)	鈴木	照藏(三)	田中	六郎(三)	金海	潤植(三)	金海	米雄(三)	高橋	通(三)	福田	英彦(三)
----	-------	----	--------	---	------	----	------	----	-------	----	-------	----	-------	----	-------	----	-------	----	-------	----	-------	----	-------	---	-------	----	-------	----	-------	----	---------	----	-------	----	-------	----	-------	----	-------	----	--------	----	-------	-------	-------	----	-------	----	-------	----	-------	----	-------	----	-------	----	-------	----	-------	---	-------	----	-------	----	--------	----	-------	----	-------	----	-------	----	-------	----	-------	----	-------	----	-------	----	-------	----	------	----	-------

宮川	繁治	一	蠶三	鈴木	泰一	一	蠶三	金子	幸三	一	蠶三	加々井	精喜	一	蠶三	竹内	孝三	一	蠶四	松岡	潔	一	蠶四	山本	弘吉	一	蠶五	櫻井	寶一	一	蠶六	岡崎	勘助	一	蠶六	中澤	二郎	一	蠶六	石田	肇	一	蠶七	西原	淳一	一	蠶七	細川	俊雄	一	蠶七	藤井	四郎	一	蠶八	中村	武男	一	蠶八	尾崎	利雄	一	蠶八	古川	正喜	一	蠶八	梶口	正	一	蠶九	遠山	正人	一	蠶九	都築	清治	一	蠶九	宮川	千三郎	一	蠶九	秋山	俊雄	一	蠶二	西田	正雄	一	蠶二	傳田	静夫	一	蠶二	牧島	章吾	一	蠶二	江口	正悟	一	蠶二	瀧澤	嘉清	一	蠶三	瀧澤	幸	一	蠶三	横澤	正雄	一	蠶三	川中	輝雄	一	蠶三	母袋忠右衛門	貞次	一	蠶三	鈴木	俊雄	一	蠶四	中西	全	一	蠶五	岡田	壯雄	一	蠶五	清水	英人	一	蠶五	上原	眞徳	一	蠶五	今井	省吾	一	蠶五	河田	榮次	一	蠶五	藤田	泰	一	蠶五	田中	英一	一	蠶五	松林	元一	一	蠶五	片山	文一	一	蠶五	今井	喜八	一	蠶五
----	----	---	----	----	----	---	----	----	----	---	----	-----	----	---	----	----	----	---	----	----	---	---	----	----	----	---	----	----	----	---	----	----	----	---	----	----	----	---	----	----	---	---	----	----	----	---	----	----	----	---	----	----	----	---	----	----	----	---	----	----	----	---	----	----	----	---	----	----	---	---	----	----	----	---	----	----	----	---	----	----	-----	---	----	----	----	---	----	----	----	---	----	----	----	---	----	----	----	---	----	----	----	---	----	----	----	---	----	----	---	---	----	----	----	---	----	----	----	---	----	--------	----	---	----	----	----	---	----	----	---	---	----	----	----	---	----	----	----	---	----	----	----	---	----	----	----	---	----	----	----	---	----	----	---	---	----	----	----	---	----	----	----	---	----	----	----	---	----	----	----	---	----

西村	國男(寶元)	戶谷	登(寶三)	永井	俊一(寶三)	小笠原	利一(絲四)	緒方	良純(絲三)	恒川	芳保(絲三)	山本	奈良三郎(絲三)	齋藤	監(絲六)	神津	治郎兵衛(絲六)	高岸	一郎(絲七)	根岸	健(絲八)	平木	小平太(絲九)	黑岩	京次郎(絲九)	山本	金之助(絲三)	六井	美行(絲三)	白川	忠行(絲三)	松村	惠一(絲三)	北澤	常雄(絲三)	一之瀬	茂(絲三)	山口	伊祐(絲三)	松野	輝彦(絲三)	有賀	茂(絲三)	尾澤	敏男(絲三)	猪原	良芳(絲三)	桑木	正義(絲三)	宮島	四郎(絲三)	小菅	貞三(絲三)	土生	珀二(絲三)	長谷川	洋治(絲六)	野島	榮作(絲六)	中村	忠義(絲七)	廣(絲七)	若林	亨(絲七)	宮代	毅(絲七)	宮川	政男(絲七)	清水	秀俊(絲六)	武藤	洋一(絲六)	岩佐	隆次(絲六)	湯佐	隼次(絲六)	岩路	淑夫(絲六)
----	--------	----	-------	----	--------	-----	--------	----	--------	----	--------	----	----------	----	-------	----	----------	----	--------	----	-------	----	---------	----	---------	----	---------	----	--------	----	--------	----	--------	----	--------	-----	-------	----	--------	----	--------	----	-------	----	--------	----	--------	----	--------	----	--------	----	--------	----	--------	-----	--------	----	--------	----	--------	-------	----	-------	----	-------	----	--------	----	--------	----	--------	----	--------	----	--------	----	--------

桐崎	橫關
源彦(豐元)	辨一(豐言)
木石	景吉(絲四)
橋本	重載(絲八)
大家	武造(絲九)
鈴木	秀吉(絲九)
寺田	依間寛之助(絲三)
小山	清(絲二)
若井	弘(絲二)
彼末	武猪(絲三)
小島	啓一(絲四)
櫻井	洵(絲六)
中非	千幸(絲六)
荒木	康男(絲七)
柳澤	榮一郎(絲五)
西尾	重郎(絲二)
山崎	尊敏(絲九)
水上	清一(絲四〇)
藤森	明美(絲三四)
伊藤	猛(絲四)
林	正平(絲二三)
宮原	秀人(絲二三)
高橋	英(絲二二)
太田	三郎(絲二二)
山口	清一(絲二)
原田	正形(絲二)
上木	忠藏(絲三)
宮坂	三郎(絲三)
東	實(絲三)
羽田	滿祐(絲四)
石原	二人(絲天)
笹川	嘉盛(絲毛)
竹内	五郎(絲毛)
海野	輝男(絲毛)
山口	亮祐(絲毛)
足立	貴昭(絲六)
江上新太郎(絲天)	秀一(絲元)
高橋	公一(絲元)
向後	正義(絲元)
山路	炳熙(絲元)

<p>枕崎 正造(緋)</p> <p>山岸 清保(紵)</p> <p>小林 良真(二)</p> <p>三宅 玉留(紵四)</p> <p>江野村 一雄(紵七)</p> <p>武井 一郎(紵三)</p> <p>佐久間 幸一(紵三)</p> <p>吉田 義夫(紵三)</p> <p>小澤 利雄(紵四)</p> <p>諸岡 市郎(紵六)</p> <p>平野 庄一(紵六)</p> <p>柳澤 六平(紵六)</p> <p>大塚 浩(紵五)</p> <p>高木 德男(紵六)</p> <p>林 正信(紵六)</p> <p>藤井 聰夫(紵三)</p> <p>井田 喜四男(紵三)</p> <p>小泉 正樹(紵三)</p>	<p>昭和十七年度會費金四圓也</p> <p>郁丸 清治(蠶七)</p> <p>緒方 善之助(蠶八)</p> <p>町田 博(蠶八)</p> <p>河田 泰(蠶五)</p> <p>長谷川 洋治(絲六)</p> <p>上木 忠士(絲三)</p> <p>佐川 嘉隆(絲五)</p>	<p>未納會費納入者</p> <p>金拾貳圓也</p> <p>(昭和十四、十五、十六年度分)</p> <p>小村 繁(蠶八)</p>	<p>金四圓也</p> <p>(昭和十六年度分)</p> <p>郁丸 清治(蠶七)</p> <p>笹川 嘉隆(絲五)</p> <p>金四圓也</p> <p>(昭和十四年度分)</p> <p>金四圓也</p> <p>(昭和十六年前期分)</p>	<p>終身會費納入者</p> <p>青木 靜志(絲五)</p> <p>準會費納入者</p> <p>金四圓也</p> <p>(昭和十六、十七、十八、十九、二十年度分)</p> <p>深町 てる(教五)</p>	<p>神津治郎兵衛(絲六)</p> <p>平尾 孝平(蠶九)</p> <p>中村 馨(蠶六)</p> <p>服部 虎雄(紵二)</p> <p>香山 清和(紵三)</p> <p>本田 圭吉(紵六)</p> <p>坂本 政雄(紵七)</p> <p>小林 忠十郎(紵三)</p> <p>木曾 信雄(紵二)</p> <p>乾 正(紵三)</p> <p>土屋 勉(紵五)</p> <p>岩崎 正典(紵六)</p> <p>高橋 典夫(紵六)</p> <p>小林 卓爾(紵七)</p> <p>柳澤 柳二(紵七)</p> <p>柴田 利男(紵六)</p> <p>加藤 聰(紵九)</p> <p>山本 邦夫(紵三)</p> <p>白田 武雄(紵三)</p>
---	--	--	---	---	---





會員動靜

(九月十五日現在)

松野 正一	(蠶一)	日本蠶絲製造會社原種課(東京都京橋區京橋三ノ二片倉館)
坂田 榮雄	(蠶二)	(勤務先)從前通(住)福井市佐佳枝中町五九(電話)四二八二、一
佐藤 良太郎	(蠶二)	(勤務先)從前通(住)金澤市湊三六通
穂坂 小牧	(蠶二)	昭和蠶絲株式會社河田蠶種製造所(愛知縣春日井郡田樂)
小林 啓介	(蠶四)	日本蠶絲製造會社原料課(東京都京橋區京橋三ノ二片倉館)
片岡清治郎	(蠶五)	日本高等女學校、日本高等家政女學校(東京都小石川區大塚町)(住)從前通
白澤 幹	(蠶五)	日本蠶絲製造會社研究課(東京都京橋區京橋三ノ二片倉館)
齊藤 菊雄	(蠶六)	日本蠶絲製造會社原料課(東京都京橋區京橋三ノ二片倉館)
小山田啓三	(蠶六)	本年三月以降病氣休養中ノトコロ退社(日本蠶絲統制山形出張所)
可兒 良夫	(蠶七)	帝國蠶業開發株式會社監査課長(東京都京橋區木挽町八ノ一九)(住)從前通
橋本 武光	(蠶七)	日本蠶絲製造會社原種課(東京都京橋區京橋三ノ二片倉館)
小林 繁	(蠶八)	昭和蠶業株式會社河田蠶種製造所(愛知縣春日井郡廣來村田樂二六五)
小澤周一郎	(蠶八)	東京高等工學校應用化學教室(東京都芝區西芝浦)
柿田 實作	(蠶三)	愛知縣作手農林學校(愛知縣南設樂郡作手村)(住)愛知縣南設樂郡作手村大字高野字榎田四番地
今村 良郷	(蠶三)	愛知縣蠶業試驗場豐川支場(豐川市)
松岡 潔	(蠶四)	長野縣蠶業取締所諏訪支所支所長(諏訪市清水町)
河野 芳春	(蠶六)	日本蠶絲製造會社原料課蠶業課(東京都京橋區京橋三ノ二片倉館)
齊藤 章	(蠶六)	興安西省開魯第二國民高等學校(住)同校會館
井口 澄男	(蠶三)	宮城縣立理農學校教諭(宮城縣立理農郡理町)(住)宮城縣立理町下小路二二
奥村 忠治	(蠶三)	日本蠶絲製造會社秘書室(東京都麹町區有樂町一ノ七蠶絲會館內)
川中 貞次	(蠶三)	滿洲國牡丹江第二五軍事務所氣付第六四六部隊
西澤 政人	(蠶三)	日本蠶絲製造會社蠶業課(東京都京橋區京橋三ノ二片倉館)
兒玉 新一	(蠶四)	(勤務先)從前通(住)尼崎市水堂池五〇
望月 壽夫	(蠶四)	都是工業株式會社研究所(京都府綾部市町)(京都府綾部市町青野橋本義郎方)
會田 誠司	(蠶五)	北支開發株式會社開發訓練所(北京市內二區成方街二三號)
竹内 寛	(蠶五)	中支派遣隊二九五八部隊本部
長末 方夫	(蠶五)	南方派遣隊八九〇五部隊
神崎 聖德	(蠶五)	日本蠶絲製造會社(東京都京橋區京橋三ノ二片倉館)(公用)
工藤 榮次	(蠶五)	東部四八部隊
小泉 恭平	(蠶五)	東部三八部隊
瀧川 春夫	(蠶五)	三洋油脂株式會社研究部(住)愛知縣南設樂郡東郷村川路
高橋 富次郎	(蠶六)	ジャワ派遣隊一〇三四三部隊
後藤 富次郎	(蠶六)	東亞毛皮洋行 代表取締役(東京都京橋區橫町一丁目一番地)
陶山 專三	(蠶六)	日本蠶絲製造會社生絲課(東京都京橋區京橋三ノ二片倉館)

故岡部康之氏弔慰金募集

謹啓 時下秋冷の候高堂益々御清祥の段奉慶賀候  
陳者元時玉縣蠶業試驗場地方技師岡部康之殿には、去る五月三十一日午後  
四時二十五分、原籍地群馬縣新田郡綿打村大字大根に於て逝去され候こ  
と洵に哀悼に不堪次第に御座候  
近年同氏は極めて元氣にして學究的意慾も益々旺盛に有之候處、昭和  
十六年四月七日突然發病せられ約二ヶ月臥床療養の後、上、司知友各位の温か  
も御高配を感謝しつゝ、只暫自宅に於て療養に専念せられ居りたる次第に  
御座候  
其の後恢復の曙光を見出せしこと幾度か有之候も長期療養のため、本年  
四月末依願退官、前記綿打村に歸郷加療中にありしものに御座候  
顧みれば岡部康之氏は、其の職を奉ずるに裁要に關して終始せられ試験  
研究に携はらるゝや、累次學會に巨大なる足跡を印し、業界の指導に當ら  
るゝや、幾多の示唆はよく斯業發達の指針ともなり、今後氏に期待するところ  
の偉大なる凡く世に識るゝところにして、今後氏に期待するところの極  
めて大なるに拘らず、前途春秋を残して空しく「泰雲院心澄良居士」の  
墓碑の下永遠に眠られ候事は痛惜限りなき次第に御座候  
尙郷里にはよし子未亡人が、朝夕故人の靈を弔ひつゝ、六人の遺児達の養  
育に敢闘せらるゝ情が、只々涙なきを得ざる次第に御座候  
就ては舊越年、茲に有志相圖り弔慰金募集の議を發起せし次第何卒左  
記御諒承の上御賛成賜はり度伏して御願申上候  
昭和十八年七月三十一日 發起人 一同

- 一、期 日 九月三十日迄  
一、送 先 埼玉縣蠶業試驗場川越支場門平潤一郎又ハ千曲會(振替東  
京四三三四一番又ハ長野六二四三番)宛岡部康之氏弔慰金  
ノ旨明記送金  
一、會計報告書ヲ以テ領收書ニ代フ

編輯後記

本月號は追悼文がありませんでした、追悼  
文の無い事は確に明い朗らかな事でありまし  
併し乍ら既報の様に今度又戦病死を遂げ護國  
の英靈となられた方が二名あり逝去された方  
もありました。私共は尊き先輩の徳を偲び以つ  
て聖戦完遂の決意を一層強固にしたいと思ひ  
ます、普通の原稿は勿論、故人を偲ぶ原稿を  
も何卒御送り下さい。

昭和十八年九月二十日印刷(非賣品)  
昭和十八年九月廿五日發行  
編輯兼 發行所 上田蠶絲專門學校內  
編輯人 萩原 清治  
印刷人(重宝)中 澤 二 郎  
印刷所 上田市原町五七九五  
印刷所 中澤印刷所  
發行所 上田蠶絲專門學校內  
社 團 千 曲 會  
電話 上田四〇六番・六六一番  
振替口座(東京)四三三四三番  
振替口座(長野)六二四三番

吉田 榮治 (絲六)	日本蠶絲製造會社工務部(東京都京橋區京橋三ノ二片倉館)
山岸 寅雄 (絲三)	日本蠶絲製造會社短絨課(東京都京橋區京橋三ノ二片倉館)
山口 英一 (絲三)	舊姓、横山、日本蠶絲製造會社下諏訪工場 工場長(住)岡谷市下濱三八二四
南林 孝三 (絲三)	鐘紡新工場(群馬縣多野郡新町)(住)新町宮本町
小林 運美 (絲六)	日本蠶絲製造會社厚生課(東京都京橋區京橋三ノ二片倉館)
小林 清志 (絲七)	日本蠶絲製造會社生絲課(東京都京橋區京橋三ノ二片倉館)
望月 太一 (絲七)	日本蠶絲製造會社生絲課(東京都京橋區京橋三ノ二片倉館)
西尾 重郎 (絲八)	(住)上田市祝町
山田 文雄 (絲九)	日本蠶絲製造會社企畫課(東京都京橋區京橋三ノ二片倉館)
瀧野 文雄 (絲九)	日本建設工業株式會社(東京都荒川區三川島)(住)横濱市神奈川區白幡西町一四
長野 彰 (絲三)	北支派遣三九〇八部隊
牧 道男 (絲三)	日本蠶絲製造會社查察課(東京都京橋區京橋三ノ二片倉館)
松村 惠一 (絲三)	那是工業株式會社(京都府綾部町)
宮下文四郎 (絲三)	日本蠶絲製造會社(東京都京橋區京橋三ノ二片倉館)公用
今村 覺治 (絲三)	片倉製絲紡績株式會社安積工場(福島縣郡山市田中三八)
林田 義雄 (絲三)	熊本縣內政部地方課(住)熊本市出水町國府一〇七七
宮原 英俊 (絲三)	那是津山航空機製作所(岡山縣津山市二ノ宮)
土屋 三男 (絲三)	日本蠶絲製造會社(東京都京橋區京橋三ノ二片倉館)公用
金丸 八郎 (絲三)	日本蠶絲製造會社資材課(東京都京橋區京橋三ノ二片倉館)
原 相模 (絲三)	日本蠶絲製造會社研究部(東京都京橋區京橋三ノ二片倉館)
石西 正美 (絲三)	南海派遣第一〇四一七部隊
板谷 隆 (絲三)	神戸製鋼所神戸工場第五機械課(神戸市葺合區脇濱町一丁目)(住)兵庫縣御影町石屋字美也一五九、昌樂莊
佐藤 俊郎 (絲三)	長野縣岡谷工業學校(住)岡谷市新屋敷五五六五 林今朝作方
小林 剛 (絲三)	(住)廣島縣吳市廣町長濱 長濱ホテル内
松野 正 (絲三)	東京海軍監督官事務所(航空) 東京都芝區新橋七丁目(住)北多摩郡國分寺町本町二ノ二八〇
江島 貴昭 (絲六)	(住)横須賀市浦郷一三一五 本本行彦方
清水 文雄 (絲三)	中部八〇部隊
三宅 和夫 (絲六)	(住)京都府宇治町字善法
橋本 和夫 (絲六)	有限會社津鐵工所(津市上濱町湖口三六九) 電話一五六二(住)津市乙部末廣通六丁目一〇四二
坂本 政雄 (絲七)	那是工業株式會社大田工場(朝鮮大田府本町三丁目)
木山 新一 (絲四)	(住)神奈川縣足柄下郡酒匂町小八幡
菅尾 源治 (絲五)	(住)尼崎市立花七ツ松稻荷六〇番地
平野 庄一 (絲六)	三浦洋行(奉天市小西區小西街一段二一號)(住)奉天市北陵區萬年街一段六號
柳澤 六平 (絲六)	吳羽紡績株式會社紡績部(大阪府東區安土町二ノ一一)(住)大阪府施市高井田一八八、吳羽寮
寺崎 隆夫 (紡六)	(住)吳市東區屋町三七ノ一
武井 和夫 (紡三)	東部第四八部隊

昭和十八年九月二十五日印刷 第三十二號 【非賣品】  
昭和十八年九月二十五日發行

千曲會指定旅館案内

旅館名	所在地	電話	宿泊料(一泊二食付)	サービス
上村館	信越線 上田驛前線	上田三四四番		
菅平ホテル	信 菅平高原	菅平 一番	四、〇〇 三、五〇	二割
別館 望岳荘	全	菅平 一番呼出	六、〇〇 五、〇〇	二割
鐵道省山の家	全	菅平 一番呼出	三、五〇 三、〇〇	二割
花屋ホテル	信州別所溫泉 泉(上田驛 ヨリ電車ニ テ三〇分)	別所 一三番 三一三番	八、〇〇 七、〇〇	一割
柏屋別荘	全	別所 一二番		
笹屋ホテル	信州戸倉溫泉 (戸倉驛ヨリ バスニテ一 〇分)	戸倉特長 三番 一〇番(別荘) 三四番(別荘) (驛前案内所) 上山 一七番 下谷(83)六番五番 (東京出張所)	八、〇〇 七、〇〇 六、〇〇 五、〇〇	二割
上田館	全	戸倉 二七番		
清風園	上山田溫泉 (戸倉驛ヨリ バスニテ一 〇分)	上山田代表 一五六番一六番 一四番(別荘) 三六番		
園山莊	全	上山田園 二九番 戸倉 七五番 淺草(80)七番 (東京案内所) 福島(45)四七番 (大阪案内所)		

發行所 上田蠶絲專門學校  
法人 千曲會

(振替口座 東京四三三三一)  
六二四三番